２０１２年１０月９日

京都大学総長
松本紘先生

石原昭彦（Prof. Akihiko Ishihara, Ph.D.）
京都大学大学院人間・環境学研究科
認知・行動科学講座　行動制御学分野
〒606-8501　京都市左京区吉田二本松町
E-mail: ishihara.akihiko.8s@kyoto-u.ac.jp

拝啓　失礼致します。

私は、人間・環境学研究科に所属しております石原昭彦と申します。現在、人間・環境学研究科（総合人間学部）の縮小・廃止で研究科は大きく揺れ動いています。私自身はこのような状況ではとても研究・教育に集中することができず、毎日が非常に苦しく辛いです。

共通教育（全学共通科目）の充実を図ることは重要であり、現状で問題ないと結論できるものではありません。しかしながら、人間・環境学研究科（総合人間学部）の多くの教員を国際高等教育院（仮称）に移籍させたとしてもそれで解決できる問題ではありません。その理由は、共通教育を専任とする教員が、それを理解してモチベーションを維持して授業を続けることができないからです。私たちは、毎日、学部学生や大学院生と一緒に研究に対して全力で挑戦を続けています。そこから生まれる独創性、斬新性、新規性は、研究を進める活力になるだけでなく、講義、演習、ゼミ、実験で大きく活用されています。全学共通科目の授業では、単に基礎知識だけを教えるのではなく、社会の動向に素早く反応して常に新しい情報や話題を提供する必要があります。これについては、日本の将来を支えていく京都大学の学生・院生に対して特に強く主張できることです。

私がこれまでに行ってきました全学共通科目の授業では、基礎知識に加えて私自身が積み重ねてきました研究成果を国内外の最新の研究と比較しながら説明しています。その説明には、常に自信と誇りと学生の将来への期待が込められています。授業に出席する学生の眼は間違いなく輝いています。授業後には、期待通りの展開を終えた充実感と、その反面、学生の勉強心を十分に引き出せなかった悔しさが混じり、いつも反省を繰り返しています。それができるのも研究を継続してきた自身の軌跡があるからです。

研究を背景に持たない授業がいかにつまらなく、学生の学習意欲を損ねるかは、京都大学での教養部、総合人間学部、人間・環境学研究科を通しての20年以上に及ぶ教育から十分に理解しています。学生がワクワクと胸を躍らせて勉強したり、多くの疑問や質問を投げかけてくれたり、さらに授業時間を超えて自主勉強したいと思う気持ちを持つことができる授業を企画するためには何が必要でしょうか。共通教育（全学共通科目）の役割は、幅広く基礎知

識を身につけることだけではなく、社会に出て生かされるもの、役立つものでなくてはなりません。

私たちが、共通教育を通してどのようなことで学生を育てることができるのでしょうか。共通教育の目的は、既存の知識を詰め込むこと、知識の幅を広めることなのでしょうか。それならば、大学で授業を受けなくてもインターネットや書籍で身につけることができます。通信教育でも問題なく行えると思います。しかし、京都大学の全学共通科目の授業はそれでは成り立たないのです。

共通教育（全学共通科目）を通して、授業内容に対して感動や強い印象を持ってもらうことが大切だと思います。学生に授業を行う先生の熱意や素晴らしさを感じて欲しいと思います。それが学生の心を豊かに、そして暖かくして、社会に役立つ京都大学出身の社会人を育てることになります。そのためには、授業を行う教員が、プライドと自信を持って学生に接することが不可欠です。そのためには、教員が学生に誇れる研究を進めていることが大前提になります。

現状で人間・環境学研究科（総合人間学部）の教員を共通教育の専任教員に移籍させたとしても、それで解決できるものではないと思います。共通教育の改革に向けては、これまでにアンケートや委員会で討論が繰り返されてきました。しかし、それが実を結んで現在の改革に至ったとは考えられません。それは、全学共通科目の授業を受講する学生や授業を行う教員の目線に合わせて、どこに問題があるのかを真に見極めていないことによると思います。学生が全学共通科目に何を期待しているのかを理解していないことによると思います。すなわち、現状では、「全学共通科目は卒業するために必要な単位を揃えるためにある」という学生の意識が前提にあるからです。学生には、「全学共通科目は重要であり、社会で必要になり、役立つものであることを理解してもらう」こと、教員には、「それを学生に理解してもらうにはどのような授業を企画しなければならないかを検討する」ことが大切と思います。

人間・環境学研究科（総合人間学部）の縮小・廃止で不安・心配なことがあります。これまでに学部を卒業した学生、大学院を修了した院生、さらに、就業中の学生・院生の気持ちを考えたことはありますでしょうか。社会に巣立った多くの学生・院生が出身学部・研究科が縮小・廃止することに対してどれほど悲しんで落胆することでしょうか。学生・院生は、総合人間学部を卒業、人間・環境学研究科を修了したことを誇りに思い、それを心に刻んで社会で活躍しています。その足場を失うことは非常に辛く寂しいことになります。どこの学部や研究科の出身者も同じ気持ちではないかと思います。これまでに築き上げた伝統や歴史を当事者の意見や気持ちを考慮せずに失くしても良いのでしょうか。共通教育（全学共通科目）を推進するシステムを再構築することは必要ですが、学部・研究科の構成員の個々の気持ちを確かめたり、理解せずに縮小・廃止することには無理があると思います。

総合人間学部・人間環境学研究科の発足以降に採用された教員は、今回の件をどのような気持ちで捉えているとお考えでしょうか。公募で厳しい審査を受けて採用された教員は、研究に対する夢と期待を持って本研究科に赴任されたことと思います。研究を生きがいとし、学生・院生を育てることに全力を捧げてきた教員の気持ちをどのようにお考えでしょうか。これは、

どこの学部・研究科の教員も同じではないでしょうか。研究分野にかかわらず、研究指導を行うことによって学生・院生が育ち、学生や院生の気持ちが理解できるようになります。そのような教育・研究環境を持たない教員が授業を展開しても、どれだけ充実した授業ができるのでしょうか。

私は、京都大学の教員であることを誇りに思います。さらに、人間・環境学研究科の教員であることを誇りに思い、研究と教育に邁進してきました。研究を基盤として、学生・院生を指導できることに生きがいと熱意を感じています。それが、学部専門科目、大学院の授業だけではなく、全学共科目の授業に大きく反映されていることは間違いありません。研究を基盤として授業が成り立っています。

今一度、人間・環境学研究科の教員の声をお聞きいただきたくよろしくお願い申し上げます。

敬具